

「幼児期から中学生の家庭教育調査・縦断調査」より

幼児期の子どもへのかかわりが 安定した生活習慣を育み 児童期以降の学びや育ちを伸ばす

ベネッセ教育総合研究所では2012年より10年間にわたり、同じ親子に対して、子どもの育ちと保護者のかかわりについての継続的な調査を行ってきました。調査開始時に年少児だった子どもが、2021年の調査では中学1年生となり、さまざまな視点での分析が可能となっています。子どものその後の育ちにつながっていく幼児期の経験や保護者のかかわりについて、目白大学の荒牧美佐子先生に、お話をうかがいました。



荒牧美佐子先生 (あらまき・みさこ)

目白大学人間学部子ども学科准教授。専門分野は発達心理学（子育て支援、家庭教育、育児感情、子どもの学力、保育の質など）。文部科学省「幼保小の接続期の教育の質的向上に関する検討チーム」委員などを歴任。本調査の監修者の1人。

年少児から中学1年生までの縦断調査で 発達のプロセスを捉える

調査では、子どもの育ちや学びのプロセスを把握するため、「生活習慣・学習態度」「学びに向かう力」「認知」の3つの軸を設定しました（図1）。これらがどのように関連しながら育っていくのかを分析することが、本調査の大きなテーマです。

このうち「学びに向かう力」は、「社会情動的スキル」や「非認知能力」とも呼ばれ、子どもの生涯にわたる学びを支える能力として注目されています。調査では「学びに向かう力」として、「好奇心」「自己主張」「協調性」「自己抑制」「がんばる力」の5つを設定しています。

先行きが不透明で予測不可能といわれるこれからの時代には、変化を恐れず、意見の異なる人とも協働し、柔軟に工夫していくことが求められ、「学びに向かう力」がますます必要となっていくと考えられています。幼児期から小学校以降にかけて、こうした力がどのように積み上がっていくかにも着目して、調査結果を見ていきましょう。

調査から見えたこと①

幼児期の生活習慣が、児童期以降の認知や 学びに向かう力の下支えに

初めに、年少児から小学1年生までの発達プロセスにおいて、「生活習慣」「学びに向かう力」「認知」の3つの軸がどのように影響しているかを見えます（図2）。図の矢印は、前の年齢から次の年齢につながることを表します。3つの軸は、年少児から年中児というように、それぞれ次の年齢につながり、年齢が上がるにつれて積み上がっていくことがわかりました。

次に注目したいのが、右上方向に伸びた矢印です。年少児の「生活習慣」は年中児の「学びに向かう力（協調性）」に影響し、年中児の「学びに向かう力（協調性）」は年長児の「認知（言葉スキル）」に影響しています。さらに、年長児の「生活習慣」「学びに向かう力（自己抑制・がんばる力）」「認知（言葉スキル）」は、いずれも小学1年生の「学習態度」を支えていることがわかりました。

これらの結果から、3つの軸の発達には順序性が

「幼児期から中学生の家庭教育調査・縦断調査」調査概要

調査の実施者：ベネッセ教育総合研究所

調査のテーマ：幼児期から中学生までの子どもの発達と保護者のかかわりとの関連性について明らかにする目的で実施

調査項目：就園・就学状況／メディア利用時間・内容・目的・使い方／認知発達／習い事／生活習慣・学習態度／養育態度・養育行動／子育て肯定感・否定感／子育て観・教育観／読み聞かせなど

調査方法：郵送法（自記式質問紙調査）

調査地域：全国

調査対象：2012年に年少児の子どもを持つ保護者（子どもを対象とした調査は、小学5年生時・中学1年生時に実施）

調査時期：2012年から毎年2～3月に実施

※同じ子どもの発達や生活の変化を捉えるため、年少児以降の縦断調査に同意し、調査に中断することなく回答した保護者のデータを分析した。子どものデータは中学1年生のみを使用した。

■ベネッセ教育総合研究所「幼児期から中学生の家庭教育調査・縦断調査」ウェブサイト

<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3684>

アクセス方法：ベネッセ教育総合研究所サイトTOPページ > 研究所について > 乳幼児・子育て研究 > 調査・研究データ > 幼児期から中学生の家庭教育調査・縦断調査



図1 子どもの育ちや学びのプロセスを把握するための3つの軸

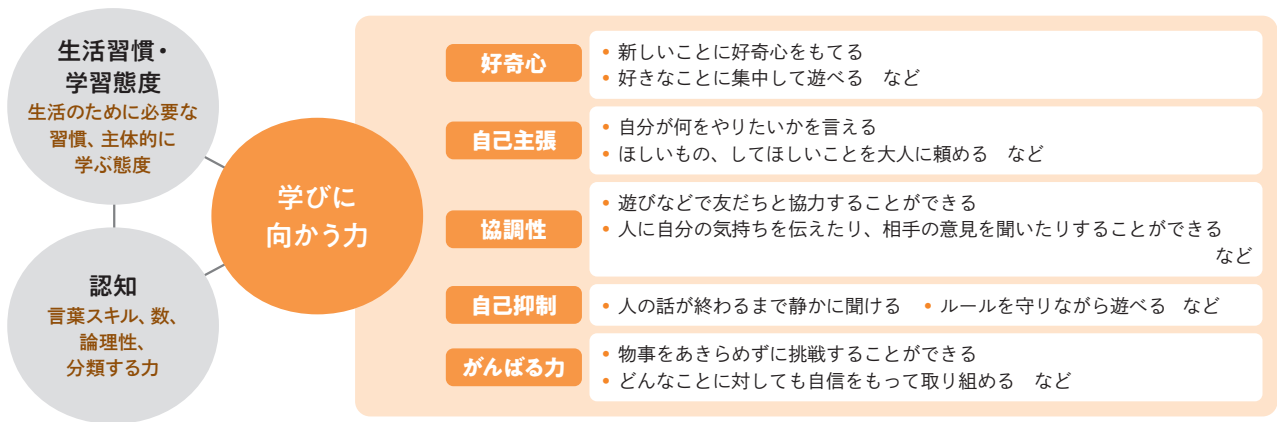
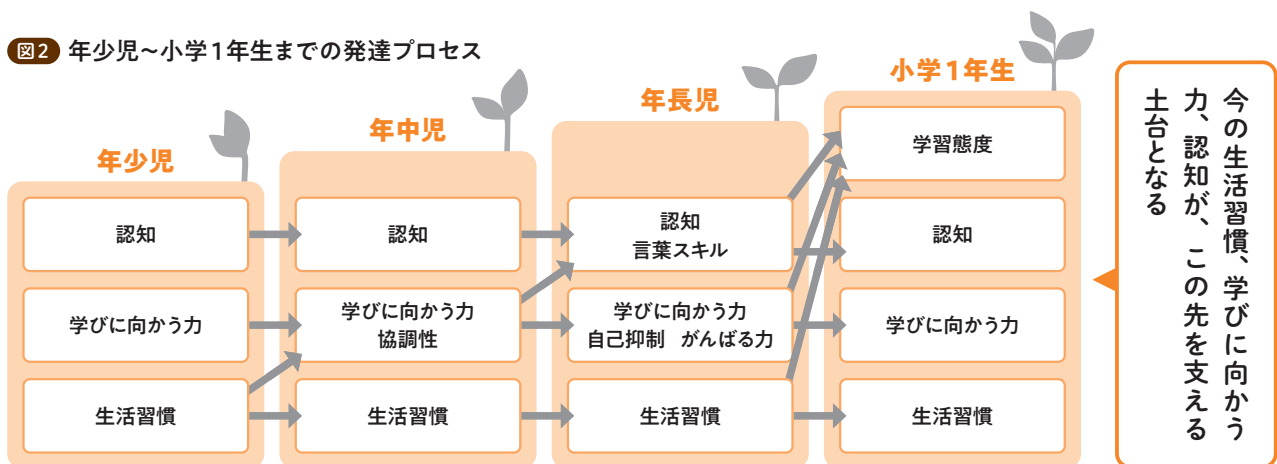


図2 年少児～小学1年生までの発達プロセス



あるとともに、「生活習慣」が「学びに向かう力」「認知」の下支えとなり、小学1年生以降にも影響を与えていることが明らかになりました。

「決まった時間に寝起きができる」「脱いだ服を自分でたためる」「遊んだ後に片づけができる」といった生活習慣を、保護者は放っておいてもいずれ身につくと考えがちです。しかし、本来は子ども一人ひとりがもっているリズムや得意・不得意、

くせなどをよく見て、そこに合わせて支えていくことが必要です。訓練をしてできるようになればよいのではなく、それが身につくまで個々の子どもにまなざしを向け、寄り添い方を理解するといった、プロセスそのものが大切になるのです。

そうして、気持ちよく身の回りのことができるようになり、生活基盤が安定した子どもは、安心した気持ちで園の生活を楽しめるようになります。

それが、「学びに向かう力」や「認知」の獲得にプラスの影響を及ぼすと考えられます。

近年、子どもの園での滞在時間が長くなるにつれ、生活習慣の定着に関する園の役割が大きくなっています。園の先生方に意識していただきたいのは、園と家庭の役割を線引きせず、保護者と協力してサポートする姿勢です。そして、単にできるようになればよいのではなく、子どもに寄り添う大切さを、保護者に伝えていくことです。こうしたサポートは、子どもの生活習慣の定着につながるだけでなく、保護者がこれから先も子どもに伴走していくための支援となるでしょう。

調査から見えたこと②

**意欲を尊重し、思考を促す態度が、
学びに向かう力を支える**

次に、幼児期から小学校高学年にかけて、子どもの「生活習慣・学習態度」「がんばる力」「好奇心」がどのように育ち、それらが中学1年生の「言葉スキル」「論理性」といった認知能力にどのようなつながるのかを、保護者の養育態度や働きかけを交えて分析した結果を見ていきます（図3）。学びに向かう5つの力（図1）は、それぞれ関係し合いながら伸びていくものですが、ここで「がんばる力」と「好奇心」を取り上げているのは、この2つが特に学力に影響する力といわれているからです。

分析からは、幼児期と小学校低学年では、保護者のかかわりとして「意欲の尊重」及び「思考の促し」が、子どもの「生活習慣・学習態度」や「好奇心」「がんばる力」の向上を支えることがわかりました。そして、幼児期以降に積み上げられた「学習態度」や「がんばる力」は、中学1年生の「言葉スキル」や「論理性」に影響していました。

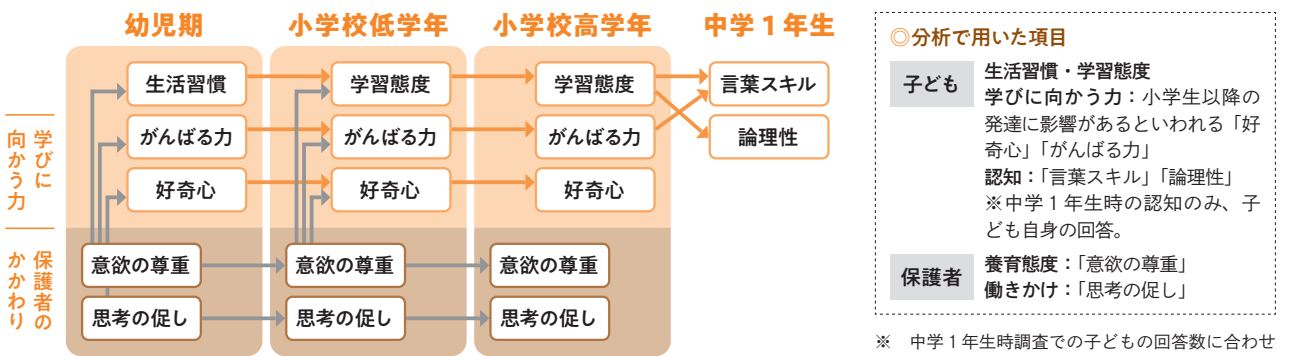
「意欲の尊重」は、子どものやりたいことを尊重して支援したり、気持ちを受け止めたりする態度です。こうした態度が重要なのは、子どもが幼児期以降、新しい事柄に対しても前向きに学び続けていくための支援として不可欠だからです。

もちろん、子どものやりたいことを何でも受け入れればよいわけではありません。園の先生方に向けた研修でも、「どこまで子どもの意思を尊重すべきか」といった質問を受けますが、子どもに何を経験してほしいのかという保育のねらいを明確にした上で、どのような実践が考えられるかを先生方で話し合っていくことが大切だと思います。

一方、「思考の促し」は、子どもの質問に簡単に答えたり、かといって自分で考えなさいと突き放したりすることなく、子どもが自分で考えられるように促す態度です。子どもに伴走しながら、子どもが興味・関心や疑問を抱いたときに、それを膨らませられるような働きかけが大切になります。

園の遊びや活動の中でも、先生方が想定して準備したものと違うものに子どもが着目し、興味・関心を抱くことがよく見られるのではないでしょ

図3 年少児から中学1年生までの追跡調査～同時期の影響



**保護者による子どもの意欲の尊重や思考を促すかかわりが
幼児期～小学校低学年の子どもの発達を支えている**

◎分析で用いた項目

子ども 生活習慣・学習態度
 学びに向かう力：小学生以降の発達に影響があるといわれる「好奇心」「がんばる力」
 認知：「言葉スキル」「論理性」
 ※中学1年生時の認知のみ、子ども自身の回答。

保護者 養育態度：「意欲の尊重」
 働きかけ：「思考の促し」

※ 中学1年生時調査での子どもの回答数に合わせて、分析データは223人分としている。
 ※ 図中の分析は、子どもの月齢、性別、母親の学歴による影響を統制している。

うか。子どもたちが遊びを通して学んでいく園という場では、これをしなければならないということにとらわれすぎないことが大切です。先生方も子どもと一緒に楽しみながら、タイミングよく、臨機応変に対応し、やり方は1つではないことを楽しんでいただけたらと思います。

「意欲の尊重」や「思考の促し」は、保護者のかかわりも重要です。共働き家庭が増える中、時間的余裕のない保護者も少なくないでしょうが、量よりも質が大切で、できるときにすればよいことを伝えてください。お迎えの帰り道やお風呂の時間など、ちょっとした時間に「意欲の尊重」「思考の促し」の2つを頭の片隅に置きながら子どもに寄り添い、話を聞いて、悩みなどがあれば一緒に考えていくようにすればよいと思います。

調査から見たこと③

幼児期に読み聞かせを楽しんだ経験が、 児童期以降の読書行動を豊かにする

最後に、幼児期の読み聞かせや児童期の読書体験共有が、中学1年生の「言葉スキル」や「論理性」にどうつながるかを見ていきます（図4）。

それによると、幼児期の「読み聞かせ頻度」が高いほど、小学校低学年及び高学年の「ひとり読み頻度」が高くなっていました。また、幼児期の読み聞かせの際に、保護者が内容について質問したり、子どもの質問に答えたりする双方向のやり取りに時間をかけるほど、小学校低学年でも本の内容について話し合ったり、感想を述べ合ったりする「読書体験共有」が増え、それが小学校高学

年での「ひとり読み頻度」に影響を与えていました。そして、小学校高学年での「ひとり読み頻度」は、中学1年生の「言葉スキル」や「論理性」の獲得に影響を与えていました。

幼児期でも子どもが1人でひらがなを読めるようになると、読み聞かせをやめてしまうケースが多いようですが、少しもったいない気がします。一緒に面白いと感じてくれる人と読むほうが読書に対する意欲も高まりますから、小学校低学年くらいまでは続けてほしいですし、その後も本の感想を伝え合うなどの読書体験の共有につなげるとよいと思います。園でも、1日に1度は読み聞かせをする、保護者だよりでお勧めの本を伝える、保育室に置かれた本を季節ごとに見直すなどの工夫をしていくとよいでしょう。

柔軟な思考で

学びに向かう力を育む園をつくる

以上の結果を受け、園の先生方には、生活習慣を育むために園で取り組んでいることや、家庭でできることを保護者に伝えていただきたいと思います。「学びに向かう力」は、生涯を通じて伸びていきますが、特別な訓練で伸ばすのではなく、園の友だちや先生との関係性の中で育っていきと捉え、子どもたちと一緒に楽しむ時間を大事にしていきたいです。「これはあまり楽しくないな」ということがあれば、なぜ必要なのかを考えてみると、やらなくてよかったことだとわかるかもしれません。そうした柔軟な思考や試行錯誤によって、先生方の「学びに向かう力」も伸びていくのです。

図4 年少児から中学1年生までの追跡調査～読み聞かせ

